名たんていカメラちゃん

ふたりのカメラちゃん

かんどり のぶお●作　たるいし まこ●絵



アメリカメラにさやカメラ

ふたりはなかよし
カメラちゃん



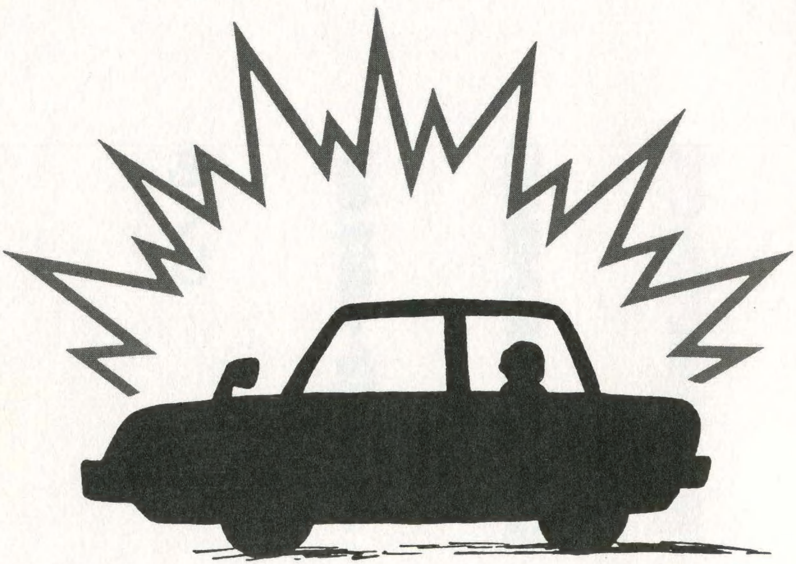
「キ・ロ・タ・タ・キー」
〝カシャッ　カシャッ！〟
カメラちゃんは、さやかの口を
じっと見ては、さっきの男の子の
口のうごきを思いだして
くらべています。



名たんていカメラちゃん

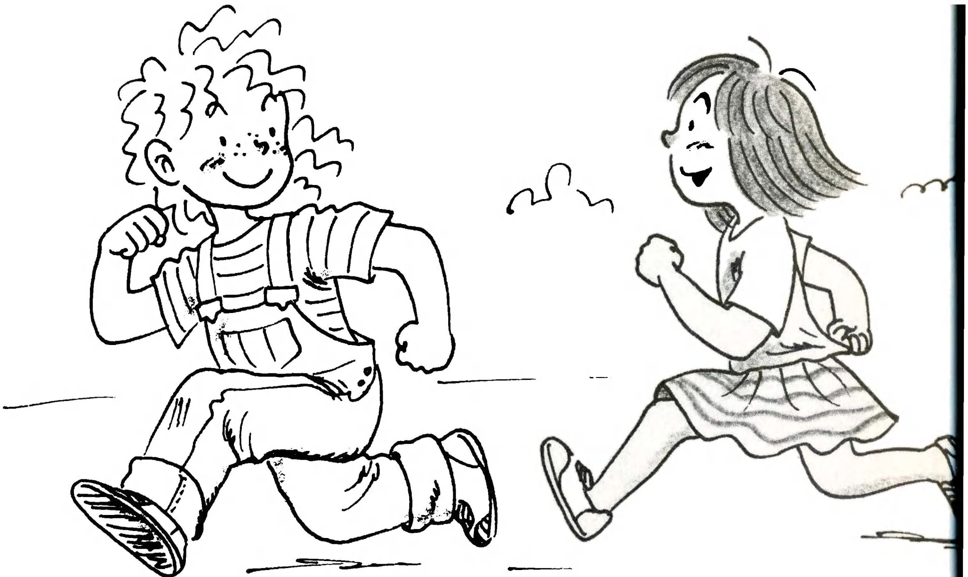
ふたりのカメラちゃん

かんどり のぶお●作（さく）　たるいし まこ●絵（え）

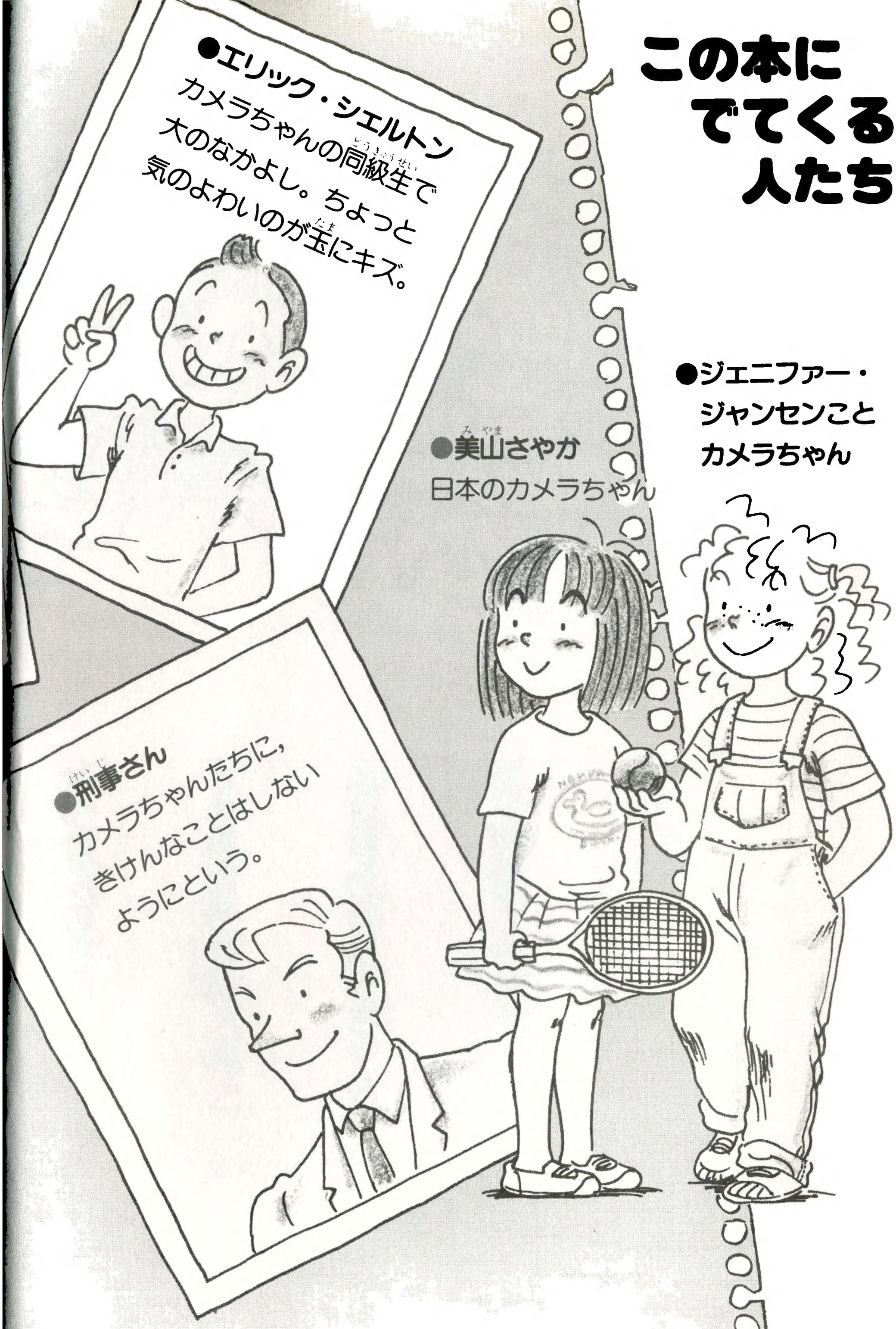




もくじ



この本にでてくる人たち




●ジョージ
口をぱくぱくさせて，カメラちゃんに合図をする。
●青い車の男
子ども用のシャツとジーンズをもって，ブティックからでてくる。
●見知らぬ男
青い車の男といっしょにあらわれ，どこへともなく消えていく。
●ジョージをつれた女
オークマンション505号にすむ。体格がいい。

さやかちゃん登場

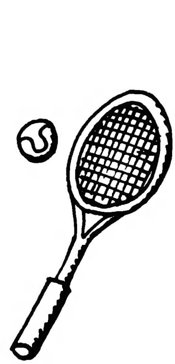
「エリック、やきゅうじゃないのよ。テニスにホームランはないのよ！」

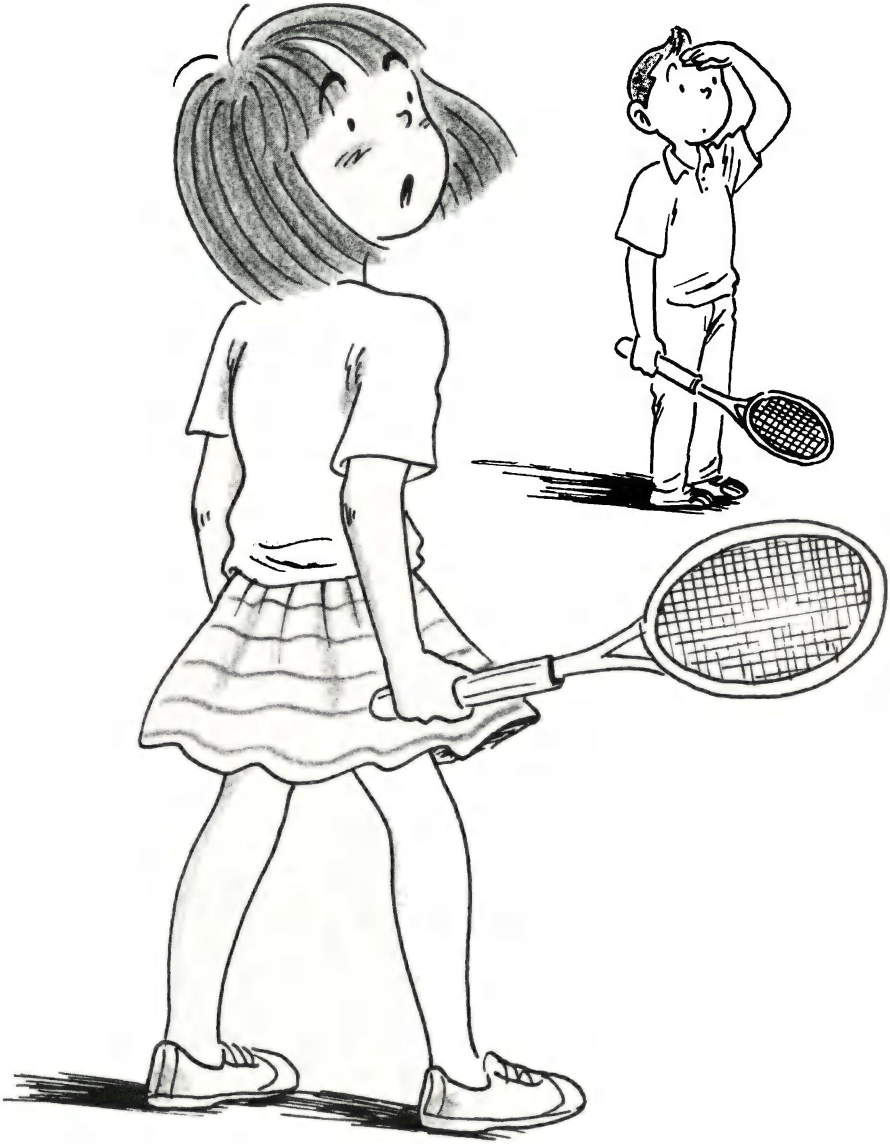
高く高く上がって、フェンスのうしろの林をこえてとんでいったテニスボールを見おくって、さやかがいいました。

「ボールは、きっと、通りのブティックまでいってしまったわ」

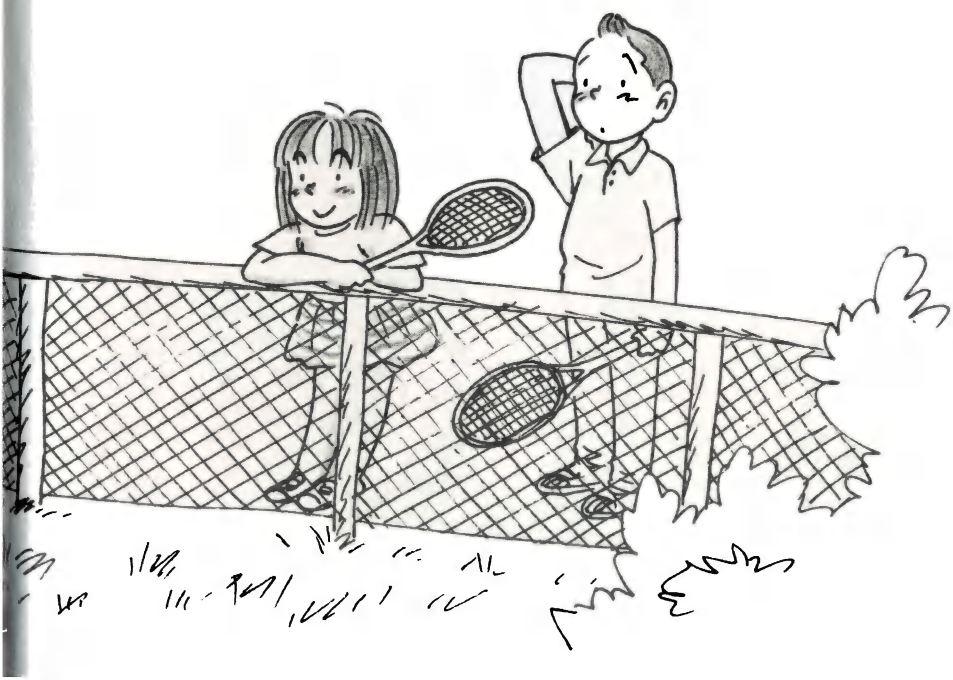
すると、フェンスのうしろにいたカメラちゃんが、「カシャッ！」といって、目をとじました。

「ちがうわ。ボールはブティックのとなりのくだもの屋さんよ。あの二つにわかれた枝のさきは、くだもの屋さんだもん。いいわ、あたしがひ





ろってくる。
エリック、これがさいごよ。こんどホームランうったら、テニスに入れてあげないわよ」
カメラちゃんは、林のあいだを走っていきました。
カメラちゃんは、ほんとうの名をジェニファー・ジャンセンといいます。でも、どんなものでも、じっと見つめて、「カシャッ!」といって目をとじると、しゃしんの



ように、見たものが頭(あたま)の中にうつってしまうのです。

「あたし、頭(あたま)の中に、見たものをうつしとるカメラがあるの」

といったので、みんないつのまにか、カメラちゃんとよぶようになりました。

いまではジェニファーとよぶのは、両親(りょうしん)と学校(がっこう)の先生ぐらいです。

きょうは日曜日です。



カメラちゃんはなかよしのエリックと、美山さやかちゃんの家へあそびにきています。あそびに、といっても、じつは、カメラの勝負をしにきたのかもしれません。

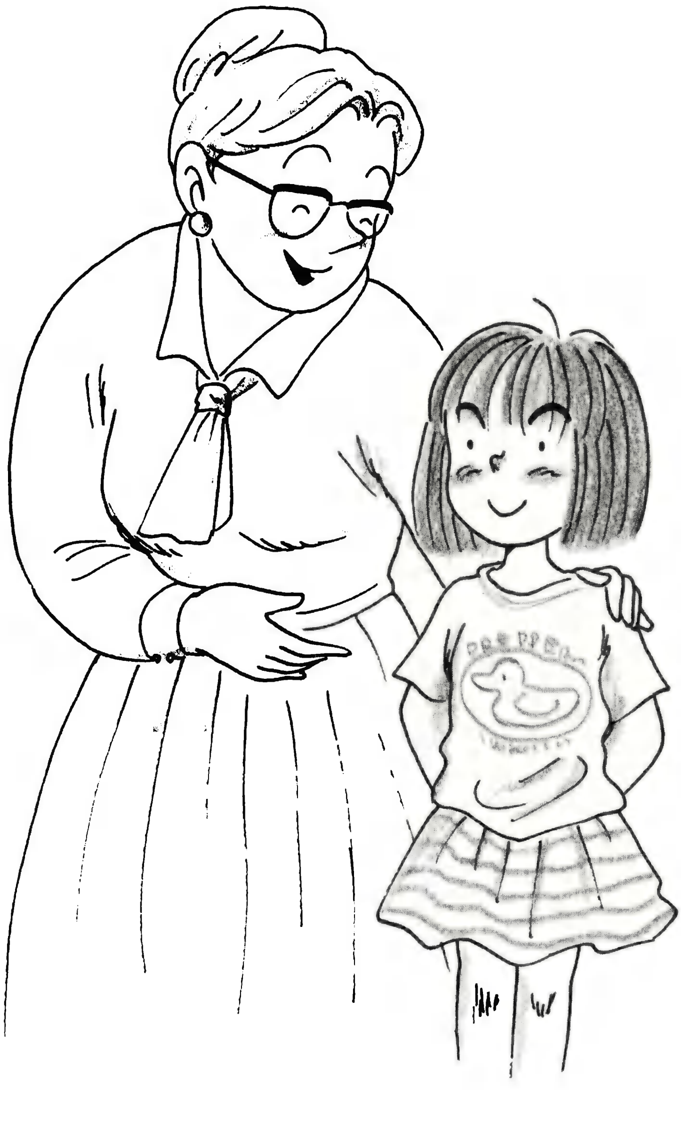
さやかは、新学期にカメラちゃんたちの町へ、ひっこしてきたばかりです。そして、カメラちゃんやエリックとおなじクラスにはいりましたが、はじめての日に、びっくりするようなことがあったのです。

朝、ベンソン先生がさやかを、クラスのみんなの前に立たせてしょうかいしました。

「ニューヨークからこの町にこしてきた、美山さやかさんです。

さやかさんは日本人ですが、ご両親の仕事で、小さいときからアメリカにすんでいるので、みんなとおなじように英語をじょうずにはなしま

す。それから、ジェニファー、ちょっと立ってちょうだい。
さやかちゃん。あの子がジェニファー・ジャンセン、カメラちゃんよ。
あいたかったんでしょう?」



ベンソン先生がいうと、さやかは、こっくり、うなずきました。
「ええ、あたし、カメラちゃんの本が大すきで、みんな読みました。カメラちゃんの本は日本の友だちのあいだでも、とてもひょうばんがいいんです。
でも、あたしもカメラちゃんとおなじように、見たものを、頭の中にうつしとれるんです。それで、本を読んでから、カメラちゃんのまねをしてるんです」
エリックが立ちあがって、いきおいこんでいいました。
「カメラちゃんのまねができるんなら、おぼえっこあそびをしてみよう



よ。ぼくたちみんなの名前をいうから、それをおぼえるんだ」

ベンソン先生はにっこりしました。

「そうね。クラスの友だちの名前は、はやくおぼえたほうがいいわ。さやかちゃん、できる？」

「ええ」

すると、カメラちゃんが手



をあげて、いいました。
「みんなに、自分の名前を書いたカードをもってもらうの。それで、どこにだれがいるか、おぼえっこしましょうよ」
「それがいい」
「そうだ。おもしろいね」
と、いうわけで、クラスのみんなが自分の名前を紙に書いて、胸のまえにかかげました。さやかは、はじからゆっくり、ずーっと見てから、「カシャッ！」といって、うしろをむきました。
クスクスわらった子が、なん人かいました。
「いい？　むかって左からいうわよ。いちばんはしが、ジム・コリンズくん、リズ・ホワイトさん、ナンシー・チャンさん、ビリー……」

エリックが手をあげました。
「まって、それじゃつまんないよ。カメラちゃんはいつも、こっちからきいたことに答えるんだ。まず、ぼくからきくね。いいかい？　さやかちゃんから見て、右から二ばんめ、前から三ばんめの席は、だーれだ？」
エリックは、カメラちゃんとあそんでいるような気になっています。
「ちぢれた黒い髪の女の子。アニタ・ロペスさん」



「どんなふくをきている？」
「ピンクのブラウスにジーンズ」
「ブラウスのボタンは？」
「まっ赤なボタンだけど、名ふだがあるから、数はわかりません……」

こんなふうにして、さやかもカメラちゃんにまけずに、きおく力バツグンのところを見せました。それでみんなは、

「このクラスには、カメラちゃんがふたり。
ジェニファー・カメラに、さやカメラ。
アメリカメラに、日本カメラ」

と、はやしたてました。

その日から、ふたりカメラちゃんとエリックは、とてもなかよしになりました。

カメラちゃんとエリックは、おなじマンションにすんでいますが、さやかは、学校からバスで十五分ほどの団地のマンションです。

日曜日。カメラちゃんとエリックは、さやかの家へあそびにきました。



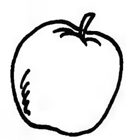
口をぱくぱく

三人はこうたいでテニスをしました。カメラちゃんとさやかは、まあまあのうでまえですが、エリックは、ときどきとんでもないたまをうちます。

それで、カメラちゃんは、フェンスのうしろで見はりに立ち、エリックのはずれだまをひろっていました。

カメラちゃんは、エリックのうった、この日四ぱつめの大ホームランをひろいに、小さな林をとおりぬけて、おもての通(とお)りまでいきました。

きょうは、あけがたまでひどい雨がふっていました。



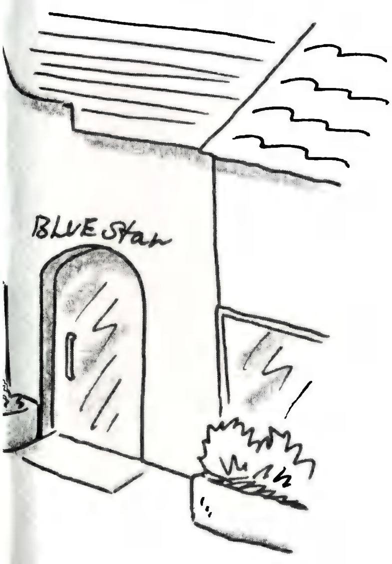
林の中や、草むらは、あちこち水たまりやどろんこがあって、歩きにくくてたまりません。でも、林をまわっていくと、とても大まわりになるので、カメラちゃんは、小さな林をつっきっていきました。

きっとボールは、そのさきの通りか、よくはずめば、むかいの商店にとびこんでいるでしょう。

テニスでなくやきゅうだったら、たいしたものなのに……。

通りには、商店がならんでいます。

テニスをはじめる前に、さやかとおぼえっこあそびをしたので、カメラちゃんの頭のカメラには、なに屋さんがならんでいるか、ちゃ

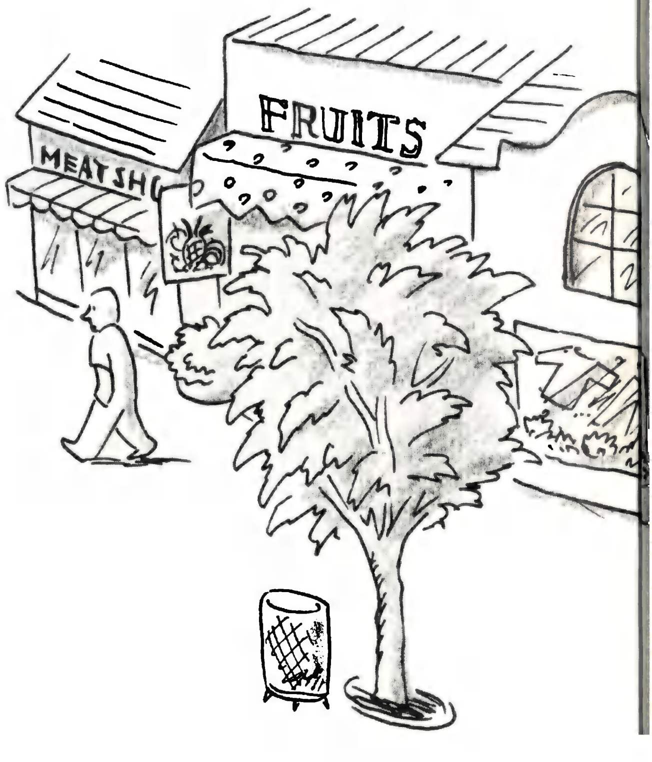


んとうっています。

左のかどからじゅんに、くすり屋、パン屋、食料品店、酒屋、ピザの店、肉屋、くだもの屋、ブティック、文房具屋……。

カメラちゃんのきおくでは、ボールは、ブティックか、くだもの屋のそばにおちているはずです。

通りのこちらがわに、青い小さな車が一台とまっています。ずっと見わたしましたが、車のむこうの通りにも、どの店の前にも、黄色いテニスボールは見あたりません。



車の下かな？　のぞこうとしたカメラちゃんは、おやっ？　と思いました。

「カシャッ！」

カメラちゃんは、車をじっと見つめてから、目をとじました。

なんだかわからないけど、なんとなくへんなのです。雨のとき、車はガレージにはいっていたのでしょう。タイヤやバンパーはぬれて少しよごれていますが、ほかのところはかわいてきれいです。

車のうしろの席に、男の子と女の人がならんですわっています。

男の子は、カメラちゃんたちとおなじ年くらいです。ぶかぶかのおとなの上着を着ています。そして、うしろのたなに、ずぶぬれのシャツのようなものが、まるめておいてあります。

女の人はむこうをむいているので、よくわかりませんが、わかい人のようです。男の子のお母さんには見えません。





男の子は、まどガラスに顔をおしつけるようにして、口をぱくぱくさせています。

たしかに、林からのぞいているカメラちゃんに気がついて、なにかいってるみたいです。でも、声はだしていないのでしょう。女の人はなにも気づかないように、むこうを見ています。

男の子は、しんけんな顔で、カメラちゃんを見つめて、口をうごかしています。

「カシャッ！　カシャッ！」

カメラちゃんはなんども目をとじて、男の子の口のうごきをうつしと

りました。どうも、みじかい、おなじことばをくりかえしているみたいです。でも、なにをいっているのか、わかりません。

「カシャッ！」

カメラちゃんの耳もとで、こすれるような声がしました。びっくりしてふりむくと、さやかでした。さやかも、黒い目をひからせて、自動車を見つめています。

さやかは、カメラちゃんがなかなかもどらないので、ようすを見にきたのです。ところが、カメラちゃんが、木のかげにかくれるようにして、車を見つめているので、自分の頭のカメラにもうつしたのでした。

そのとき、ブティックから、男の人がでてきました。やせた背の高い、三十ぐらいの男です。

両手で、子ども用のジーンズをひろげて、サイズをはかるようにぶらさげています。かたほうの手にかかえているのは、クリーム色のテニスシャツみたいです。

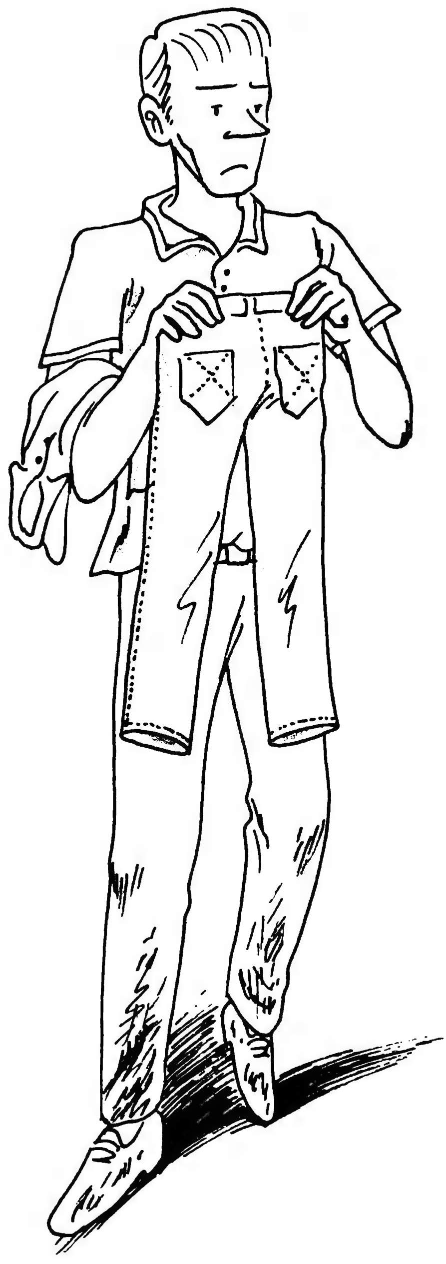
「どうしたんだい？　ボールは見つかったかい？」

エリックが、大きな声でいいながらでてきました。

男の人は、どきっとしたようにこっちを見ると、ジーンズとシャツをまるめ、つかつかと通りをわたって、車のドアをあけました。

男は、こわーい顔で、三人をにらみつけると、ひくい声でなにかいいました。

女の人は、こっちをふりかえってから、男の子の顔を見ました。それから、もう一どカメラちゃんたちを見て、男の人になにかいいました。



男は、二、三ど首(くび)をふると、またこっちをにらみつけて、車にのりこみ、いきおいよく走らせていきました。

男の子は、もう、なにもなかったように前をむいていました。

びしょびしょ　どろんこ



カメラちゃんとさやかは、しばらく顔(かお)を見あわせていました。

ふたりはいっしょに、

「カシャッ！」

といって、目をとじました。

「ボールが見つからないよ。ブティックの人は、テニスボールなんか見

なかったって」

通りのむこうへわたったエリックが、大きな声でいっています。

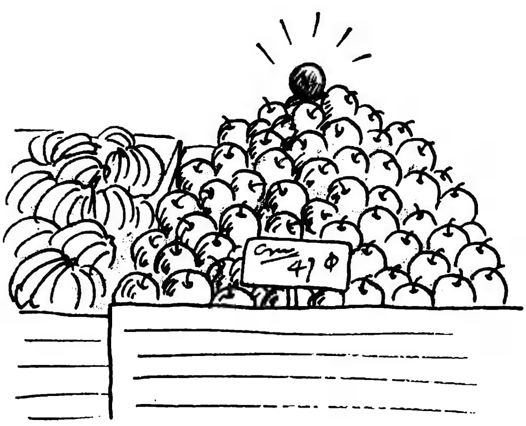
「なにしてるんだい？　いっしょにボールをさがしてくれよー」

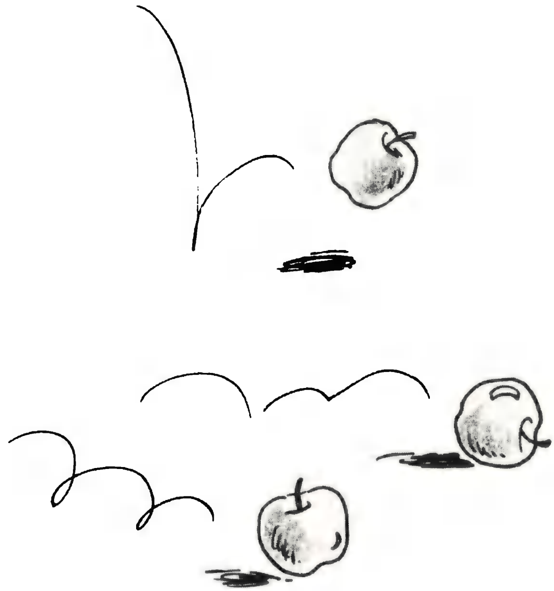
「カシャッ」

カメラちゃんとさやかは、いっしょに目をひらいて、プーッとふきだしてしまいました。

「あった！」

黄色いテニスボールがどろどろによごれて、くだもの屋の店先の、いちばんすみにあったリンゴの山の上に、ちょこんとのっています。





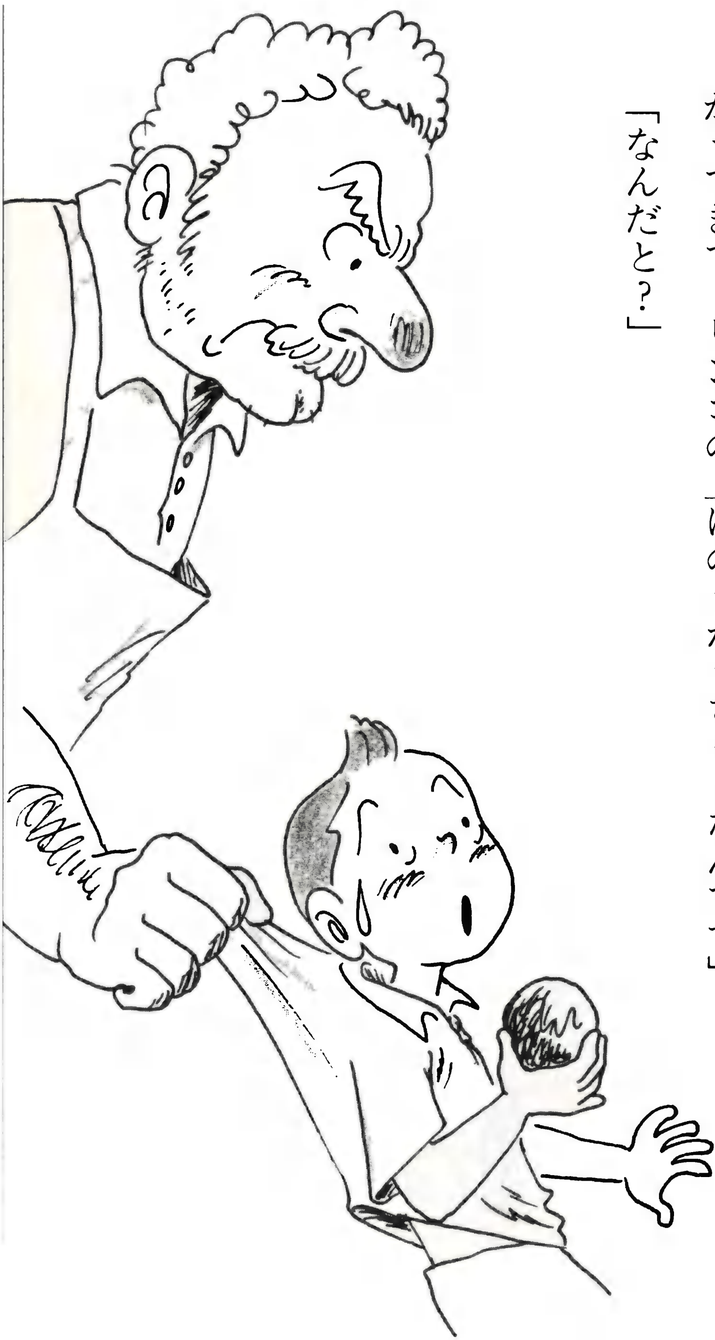
エリックは、つみかさねてあるリンゴに手をついて、ボールをとりました。

すると、リンゴが二つ三つくずれて、ころがってしまいました。

「こらーっ！　リンゴどろぼうっ！」

店（みせ）のおくから、でっぷりふとった赤い顔（かお）のおじさんが、とびだしてきました。といっても、ドタドタと、かぼちゃがころがってきたみたいな走りかたです。

エリックは、ボールをもって、あわててにげようとしましたが、思いなおしてたちどまりました。
「ちがいますよ。リンゴなんかとっていません。テニスのボールがころがってきて、リンゴの上にのっかっちゃったんです」
「なんだと？」



くだもの屋さんは、ぎょろっとした目をきょろきょろうごかして、エリックの顔と、手にしたボールとを見くらべています。
「まあ、おいしそうなボール。ころがったのは、ボールじゃなくて、リンゴのほうだったみたい」
とおりかかったおばさんが、ころがったリンゴをひろって台にのせました。
「しょうがないやつだ。リンゴがよごれてしまったじゃないか」
くだもの屋さんは、ぶつぶついいながら、ハンカチでリンゴをふいて、もとどおりつみあげました。
「カメラちゃんの勝ちだ。ボールはくだもの屋さんにあったよ」
さやかは、ぺろっと舌をだしました。

「まけちゃったわ」
「でも、いい勝負だったよ。くだもの屋さんといっても、ボールがあったのは、いちばんはしっこ。ブティックのショーウインドーから一メートルもはなれていなかったしね。
　でも、このボール、あそこの水たまりにおちたみたい。びしょびしょのどろんこだよ」
「あっ！」
「あっ！」
　カメラちゃんとさやかが、どうじにいいました。
「あの子、ぬれてどろだら



けだったんだわ。それでシャツをぬいで、おとなの上着をきていたのよ。ズボンもきっと、よごれてたにきまってる」

カメラちゃんがいいました。

「あの男の人も、ズボンのすそがよごれていたし、シャツにもどろがはねあがっていたわ」

さやかは考えこみました。

「なにかへんだと思ったのは、それだったのね」

「車はよごれてなかったもの。あの子と男の人、おもてでなにかあったのよ。夜の雨で、あちこちぬかるんでいたもの。エリックはなにか気がつかなかった?」

カメラちゃんがきくと、エリックは、きょとんとして、ちょっと考え

てからいいました。

「へんだったよ。カメラちゃんもさやかも、木のかげにかくれて、車をのぞきこんでいるんだもん。

　まどがしまってたから、ボールが車の中にはいるわけがないじゃないか。

　でも、あの男の子もへんだったな。車のまどに顔をつけて、金魚みたいに口をぱくぱくさせていたね。

　あの子のふくがよごれてたから、ブティックで買ってきたんだろ。おかしくはないよ」



「そこがへんなのよ。ちょっとまって。カシャッ！」

カメラちゃんは、目をとじてから、またぱっと見ひらきました。

さやかも、ちょっとおくれていいました。

「カシャッ！」

「ふくがよごれて、新しいのを買うんなら、あの子をつれていって、お店で着がえさせるんじゃないかしら」

カメラちゃんがいうと、さやかも目をぱちっとひらいています。

「あの男の人、ズボンのサイズを見てたみたいだけど、そんなことしなくても、あの子がいっしょにいけばすむことじゃない。

それに、ガレージから車で出てくるのなら、ふくは家で着がえればいいじゃない。まさか、着がえがないはずないもん」

「男の子を車の外にだしたくなかったのよ。だしてはつごうがわるかったのよ」

「そういえば、あの子のうごきかた、へんだったみたい。

出られないように、足をしばるかなんかしてあったんじゃないかしら？」

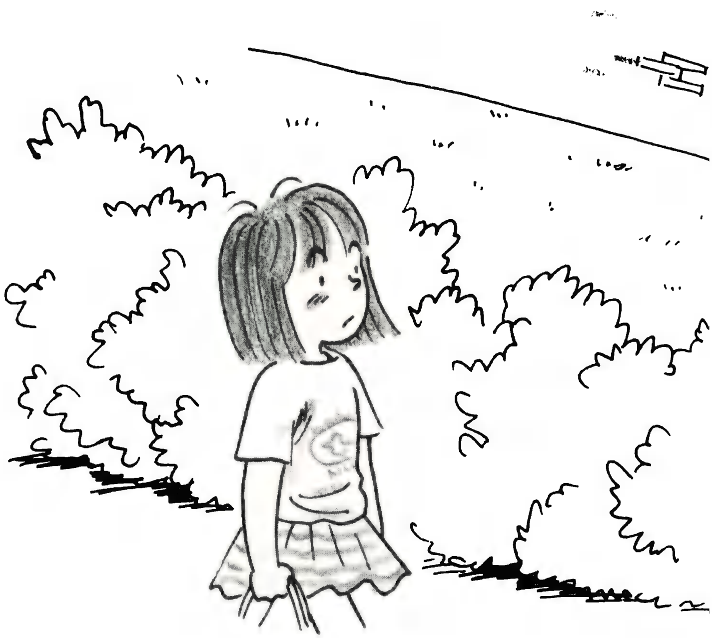
「どろんこだったのは、どこかでにげようとしたのかもしれない」

「あの男の人も、女の人も、なんだかようすがへんだったわ」





「男の子が口をぱくぱくさせていたのは、なにかいいたかったんじゃないかい？　声がだせないから、口だけうごかして、ことばを読んでもらおうとしたんだぜ、きっと。カメラちゃんがふたりもいたんだろ。なにをいってたか、思いだせないかい？　カシャッ！って」
エリックが、じりじりしていいました。
「カシャッ！」
さやかが、目をとじて、またあけていいました。
「あたし、あの車をなんども見た

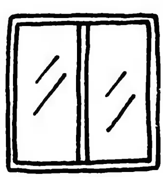


ことがあるわ。
そうよ、学校へいく、バス停の
ちかくのマンションに、いつもと
めてあった車だわ。うちのとなり
のマンションの、ガレージよ」
「すると……」
カメラちゃんは、いいかけて、
ちょっと考えてからつづけました。
「あの人たちのすんでいるとこはわかったわね。それじゃ、あの男の子
がなにをいいたかったのか、きめてから、そこへいってみましょうよ」
「そうね。カメラちゃん、あの子の口のうごかしかたをまねしてみて。

あたしが、読んでみるわ」
さやかがいうと、カメラちゃんは、目をとじました。
「カシャッ！」
カメラちゃんは、目をとじたまま、声をださずに口をうごかしました。
舌のうごきもよく見えるように、ゆっくり大きくうごかしました。

イトラタイ!?

「イ、ト、ラ、タ、イー」
カメラちゃんが口をうごかすのにあわせて、さやかも口をうごかして、
声をだしてみました。





エリックは、ふたりの口を見くらべて、まねをして声をだしてみました。でも、なにをいったのか、さっぱりわかりません。

「キ、ロ、タ、タ、キ」

「なんだい、キロタタキって？　こんなことしても、なんにもならないよ。もっといいやりかたはないのかい？」

エリックは、ばかばかしくなってきました。

「もうやめて、テニスをしようよ」

でもカメラちゃんはあきらめません。目をあけていいました。

「ほかにもいってたわ。二つあわせれば、もっとよくわかるかもしれない。まって。やってみる」

カメラちゃんは、目をとじました。

「カシャッ！」
カメラちゃんは、また目をつぶったまま、声をださずに口だけうごかしました。それを見て、さやかが、声をだしてみます。
「タ、ツ、エ、テ」
「もう一ど」
「タ、ツ、エ、テ」
「わかんないよ」
「ちょっとまって。こんどは、あたしが見てるから。さやかちゃん、いまいったことを、も



う一どいってみて」
カメラちゃんがいいました。
さやかは、くりかえしていってみました。
「タ、ツ、エ、テ」
「キ、ロ、タ、タ、キ」
さやかがいうのを見て、カメラちゃんは、首をかしげました。
「なにをいってるんだよ。ばかみたいだ。人が見てわらっているよ」



エリックは、つまらなそうです。

「そうだわ、さやかちゃん。こんどは、一字ずつ、口の形をとめてみて。

あたしのカメラにうつっているのとくらべて、どこがまずいのか考えてみましょうよ」

「いいわ。いくわよ……タ」

「カシャッ…いいわ、つぎは？」



「ツ」

「カシャッ！　もう一ど。ちがう、もう一ど」

カメラちゃんは、さやかの口の中をのぞきこんでは、男の子の口のうごかしかたを思いだしてくらべてみます。

そして自分(じぶん)でもいろいろ声をだしていってみました。

「ツじゃない。舌(した)がそんなにつよくはずまなかった。ツ、ツ、ス……そうだわ、ス、よ」

さやかは、つぎの字をいってみます。

「エ、エ」

カメラちゃんは、またさやかの口をのぞきこんでは、くりかえしていってみました。

「わかった！　つぎは、ケよ。のどのおくをつまらせて、エっていったみたい。そうすると、タツエテは、タスケ……。あっ！　タスケテよ。あの男の子、〝たすけて〟っていったのよ。すると、もう一つの、キロタタキは、なにかしら。さあ、さやかちゃん。もう一どがんばってやってみましょう」



　こうして、だいぶ時間（じかん）はかかりましたが、キロタタキは、イトラタイではなく、〝ヒトサライ〟じゃないかと、きまりました。

「〝人さらい、たすけて〟だったのよ」

カメラちゃんが、ちょっと青ざめ

ていいました。
「あの子、人さらいにさらわれたんだね。きっといまごろ、はこに入れられ、船にはこばれてるよ。外国へ売りとばされて、どれいにされちゃうんだ。足をくさりでつながれて、むちでぶたれながらはたらかされるんだ」
エリックも少し青ざめて、目をくりくりさせていいました。
「ばかね、そんなのむかしの話よ。子どもをかえしてほしければ、百万ドルだせって、あの子のお父さんにようきゅうするのよ。たすけにいきましょう」
「たすけるって、どこへいくんだい？」
エリックが、カメラちゃんにいうと、さやかがいいました。

「だって、あの車のあるとこならわかっているのよ。うちのとなりのマンションのガレージで、よく見たわ。
でも、ここにひっこして三か月にもなるのに、あの男の子を見たのは、きょうがはじめてよ」
「そうよ。どこか遠くからゆうかいされてきて、あのマンションにとじこめられているのよ。いってみましょう」
でも、さやかはしんちょうです。
「けいさつに知らせたほうが、いいん



じゃないの？　あいてがなん人いるかわかんないし、マンションのどのへやかもわからないのよ」

「さやかちゃん、けいさつへいって、なんてはなすの？　車の中の男の子が、口をぱくぱくさせて、〝たすけて、ひとさらい〟っていったみたいだっていうの？　きっとけいさつでは、『おじょうちゃん、知らせてくれてありがとう。こんどテレビにでられるように、はなしといてあげるからね』っていわれるくらいじゃない」

「そうね」

さやかは、カメラちゃんにいわれてうなずきました。

「とにかく、そのマンションへいってみようよ。なにかわかるかもしれないよ」

エリックがいったので、みんなでようすを見にいくことにしました。
このへんのマンションは、東京のように、高い建物（たてもの）がびっしりならんでいるのではありません。まわりが広くて、しばふや木立（こだち）にかこまれて、一むねずつはなれてたっています。



男の子がつれていかれたと考えられる一号館も、まわりに、はば五メートルほどのしばふがあり、さらに、そのまわりが木立になっています。三人は、木立の中から、ようすを見ました。朝見た青い小型車が、げんかんわきにとめてあります。車には、朝とはべつの男の人が運転席にいます。

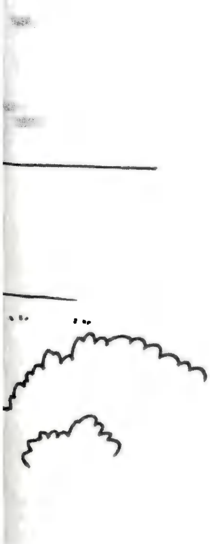
しばらくすると、男の人は車からおりて、マンションの中へはいり、エレベーターにのりました。

エレベーターのドアがしまると、カメラちゃんが、

「ここでまってて、見てくる」

といって、とびだしていきました。

「なにを見にいくんだい？」



エリックが、あとをおいかけていきそうなのを、さやかがひきとめました。

「わかってるじゃない。いまの人がなん階でおりるか見るのよ。大ぜいいったら気づかれちゃうわよ」

マンションは十四かいまであります。

もしとちゅうで、ほかの人がのったりおりたりすれば、エレベーターのとまった数字を見ただけでは、男

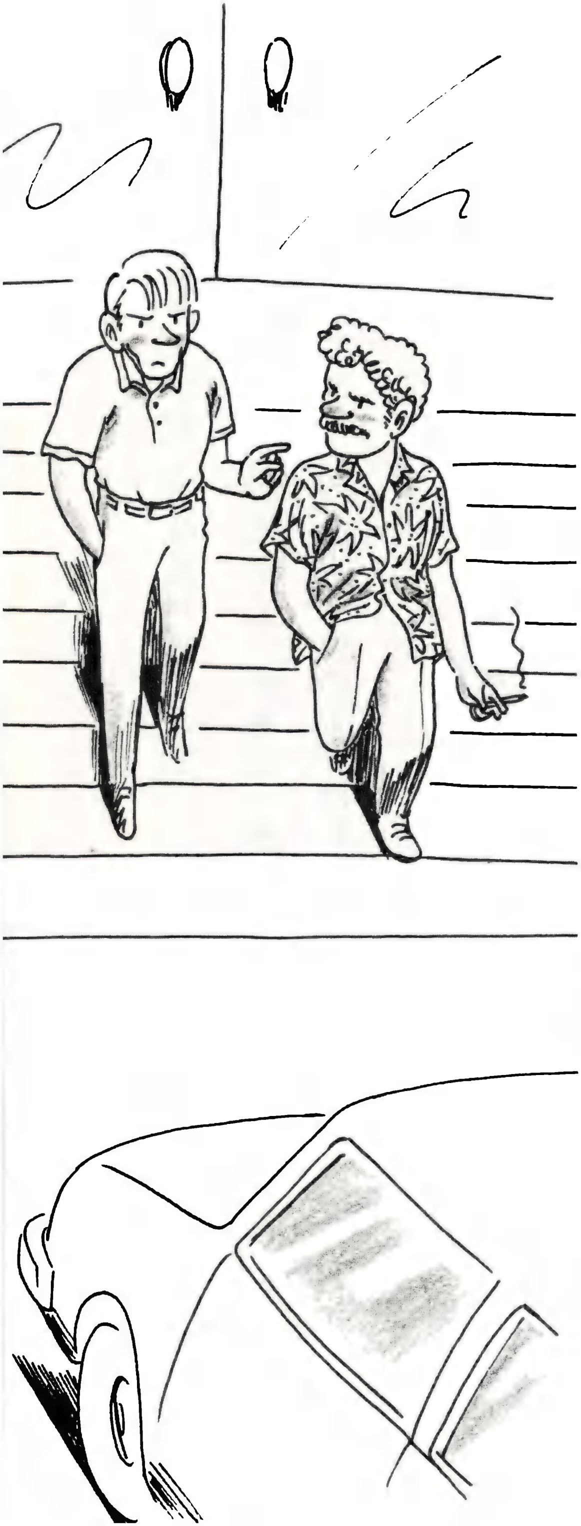


がなん階（かい）でおりたかわかりません。
でも、うんよく、エレベーターは、五かいでとまったまま、しばらくまっても、うごきそうもありません。きっと、ほかにのりおりした人がなく、男が五かいでおりたのでしょう。
カメラちゃんは、これからどうするか、そうだんしにもどってきました。

せっけんの手紙（てがみ）



「五かいでとまったわ……」
カメラちゃんがいいかけたとき、さやかが口にゆびをあてました。
「シーッ！　またでてきたわ」



ふりかえると、朝青い車を運転していた男が、もう一人、はじめて見る顔の男といっしょに、エレベーターからおりてきます。

二人の男は、マンションのげんかんで、二こと、三こと話しあいました。そのあと、見知らぬ男は青い車にのっていきました。

朝見た男は、そばにとめてあった赤い車にのりこみましたが、なぜか、

すぐにはうごきだしません。そのまま、二、三ど時計を見ていました。

そして、五分ほどしてから、車を走らせていってしまいました。

「いまならきっと、女の人と男の子だけしかいないよ。たすけにいこうか?」

カメラちゃんがいいましたが、エリックははんたいです。

「口のうごきかただけで、ほんとにあの子がさらわれたのかどうか、わかんないじゃないか。ぜんぜんちがうことをいったのかもしれないよ。それに、五かいとわかっても、五かいに六けんあるよ。どのへやかわかんないじゃないか」

「まって、カシャッ!」

さやかが目をとじました。一分ぐらいたってから、さやかは目をあけ

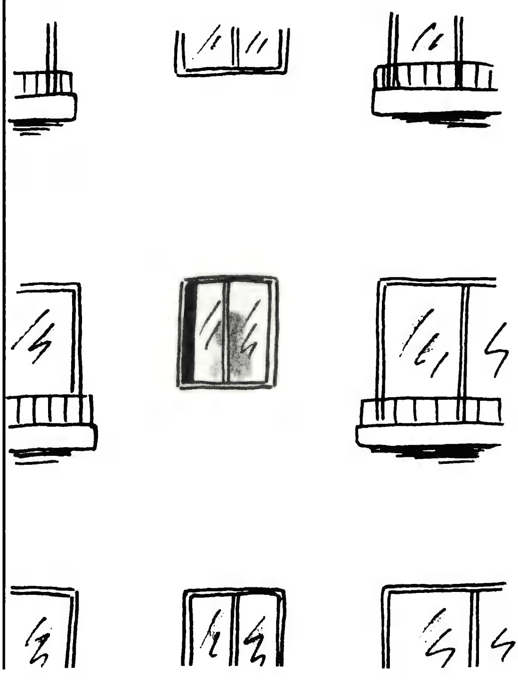
ました。

「あたしはいつも、このマンションの前をとおって学校へいくんだけど、五かいの左から二ばんめのまどは、いつもブラインドがおりてたみたい。たしかにそうよ。カシャッ！」

　また目をとじていいました。

「そうだわ！　きのうとおとといは、ブラインドがあいていたけど、その前はずっとおりていたように思うわ。あのまどがあやしい」

　三人は、マンションの五かい、左から二ばんめのまどを見ました。少しあいています。でも、それだけのことで



す。べつだんかわったところはありません。

さあ、どうしよう?

三人ともだまって見上げていました。そのうち、まどに、ちらっと人かげがうごきました。白っぽいシャツをきた子どものようです。すりガラスごしなので、はっきりとはわかりませんが、背(せ)かっこうは、男の子のようです。

その子は、カメラちゃんたちのほうを見ているみたいですが、はっきりしません。

とつぜん、あいたまどのすきまから、なにか白いものが、すーっとおちてきました。

なんだろう?



白いものを目でおって、もう一ど見上げたときには、子どものかげはきえていました。

「ぼく、とってくる」

エリックがひろってきたものは、トイレットペーパーをまるめて、中にせっけんをつつんだものです。

「なんだろう？」

「なにかしら」

ちょっと見たところ、だいぶつかって小さくなったみどり色のせっけんを、白いトイレットペーパーでくるんだだけのものです。首(くび)をかしげていると、さやかが、黒い目をきらっとひからせていいました。

「おや？　ここを見て！」

紙をななめにしてよく見ると、うすーいみどり色で、字のようなものが書いてあります。せっけんで書いたのでしょう。目をこらして見ると、こう読めます。

《けいさつ　よんで　ジョージ　たすけて》

「やっぱりそうよ、あそこだわ。たすけにいこう」

と、カメラちゃん。

「まてよ、たすけるって、どうやってたすけるんだい」

エリックがいうと、さやかもいいます。

「女の人のほかにも、だれかいるかもしれないわ。それに、『けいさつよんで』って書いてあるじゃないの。あたし、電話してくる」

「そうね、いいこと考えつきそうよ。あたし、エリックと、あの五かい



を見はっているから、さやかちゃん、けいさつに電話をかけてきて。

いままでのこと、みんなはなせば、けいさつの人もわかってくれるわ。

それから、これもさやかちゃんがもってくといいわ」

カメラちゃんは、せっけんとトイレットペーパーを、さやかにわたしました。

さやかは、自分がすんでいる、オークマンション二号館へとんでいき



ました。

目の前のマンションにも、一かいロビーに、公衆電話があるのですが、ここだと、とちゅうで男たちが、かえってくるかもしれません。

「はい、こちら、けいさつ。なにがあったのですか？」

「オークマンション一号館に、男の子がゆうかいされて、とじこめられているんです」

「ふーん、あんた子どもみたいだね、



年はいくつ？　そう、十さいね」
「ゆうかいされたのは、あたしじゃないんです」
「それはわかっている。このごろ、いたずら電話をする子が多いもんでね。じゃあ、住所と名前をいってごらん」
「オークマンション二号館一二〇一号の、美山さやかです」
「じゃあ、どうしてその男の子がゆうかいされたとわかったのかね？くわしくはなしてごらん」
さやかは、ブティックの前で車を見たときのことから、じゅんをおって説明しました。
「でも、そのマンションが男の子の家かもしれない。車にのせた人たちはお父さんとお母さんか、親せきの人かもしれないんだよ」

けいかんは、なかなか信用してくれません。

「でもおまわりさん。その子のふくは、よごれていたのに、車はぬれていないんです。朝、雨がやんでからでかけたのなら、ふくはぬれていないはずでしょう？　それに自分の家なら、ふくがぬれても、おとなのふくを着せて買いにいかなくても、着がえはあるでしょう」

さやかは、いっしょうけんめいです。カメラちゃんと、男の子の口のうごきを読んだこともはなしました。

おまわりさんは、カメラちゃんを知っていました。



「ほう、カメラちゃんもいっしょだったのかい。でも、読心術もできるのかね」

「ドクシンジュツってなあに？」

「読心術というのは、口のうごきを見て、なにをはなしているか読みとる術だよ。でも、なかなかむずかしいから、それだけじゃあてにならないな」

「いえ、そのあと、その子がマンションのまどから手紙をなげたんです」

さやかは、せっけんをつつんだトイレットペーパーのことをはなしました。

「せっけんで、トイレットペーパーに書いた手紙だって？　なかなかいいアイデアだね。テレビドラマみたいだ。《ぼくは、あくまにつかまって

いる。血をすわれて死んでしまうんだ……たすけてくれーっ！》と、書いてあったんじゃないかい？」

「ちがいます。じょうだんでいってるんじゃありません。こう書いてあるんです。《けいさつ　よんで　ジョージ　たすけ……》」

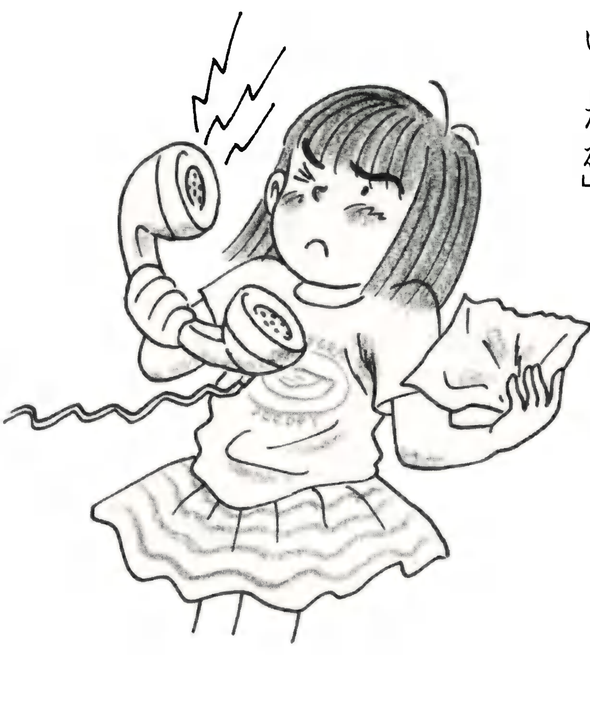
「なにっ！　ジョージ？　ジョージってジョージっていったね」

けいかんは、さやかがいいおわらないうちに、ききかえしました。

「ええ、ジョージって……」

「よし、すぐいく！　オークマンション一号館だね？」

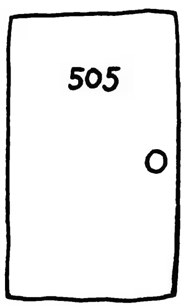
「五〇五号だとおもいます。正面か



ら見て左から二ばんめです」

「すぐいくから、きみたちは、遠くから見はっていなさい。けっして近づいちゃいけない。気づかれないようにするんだ。ぜったい気づかれないようにな！」

すりかわり作戦



「カシャッ！」

さやかが電話をかけにいくのを見おくりながら、カメラちゃんは目をとじました。ゆっくり目をあけると、エリックをじろじろ見ていいました。

「いいこと考えたわ。エリック、あんた白いテニスシャツにジーンズでしょう。髪もくり色だし……さあ、いきましょう。あの子をたすけだすのよ」

「でも、さやかちゃん、けいさつに電話しにいったじゃないか。ぼくたちは、ここで見はっていればいいんだよ。ぼくたち二人だけでたすけだすなんて、むりだよ」

「だいじょうぶ、いい手があるの。それにね、男の子は人質になってるのよ。人質って知ってるでしょう？ けいさつの人がくると、人質の首に大きなナイフをつきつけて、ひっこめってておどすのよ。へたをすると、あの子、ほんとにナイフでさされるかもしれないわ。



それとも、けいさつより先(さき)に男たちがかえってくれば、ピストルのうちあいになるかもしれない。

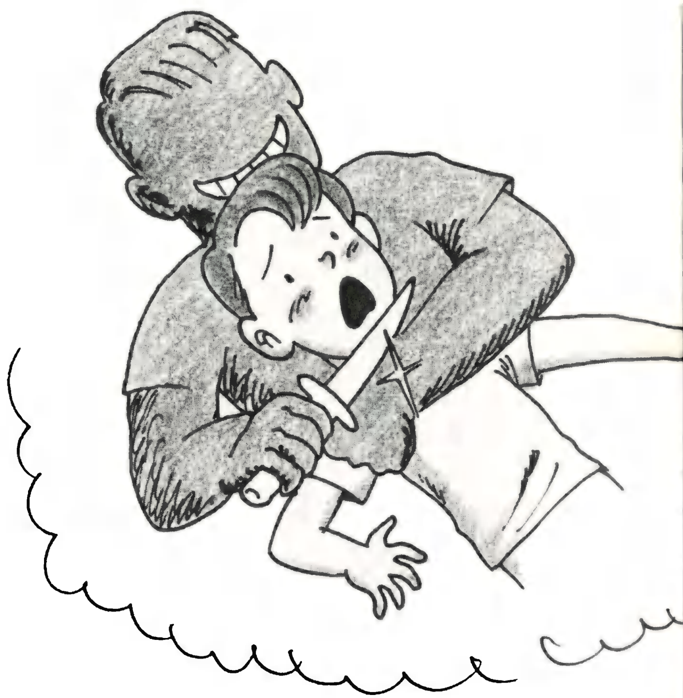
そうすれば、あの子にたまがあたるかもしれないのよ。

そのまえに、あの子を外につれだすのよ。

ね、こうするの……」

カメラちゃんは、ヒソヒソとエリックに作戦(さくせん)をおしえました。

「うまくいくかな？」



エリックは、自信なさそうにうなずくと、カメラちゃんといっしょに、マンションのげんかんにはいりました。

マンションをはいったところがロビーで、おくにエレベーターが三台ならんでいます。

エレベーターの前にろうかがあり、右と左に三げんずつ、へやがあります。

ろうかのつきあたり、つまり、マンションの両はしにかいだんと、非常ドアがあります。

エリックは、外から見て左のかいだんへむかいました。
カメラちゃんは、エレベーターを見ました。三台ともとまっています。ちょうどお昼で、みんな食事をしているのでしょう。カメラちゃんのおなかがグーッとなりました。
カメラちゃんは、左はしのエレベーターにのりました。にもつのつみおろし用に、すきなかいにとめたままにできるタイプです。
カメラちゃんが五かいでエレベーターからおりると、まもなく、エリックが、かいだんの非常ドアのかげから顔をだして、指でVサインをしました。

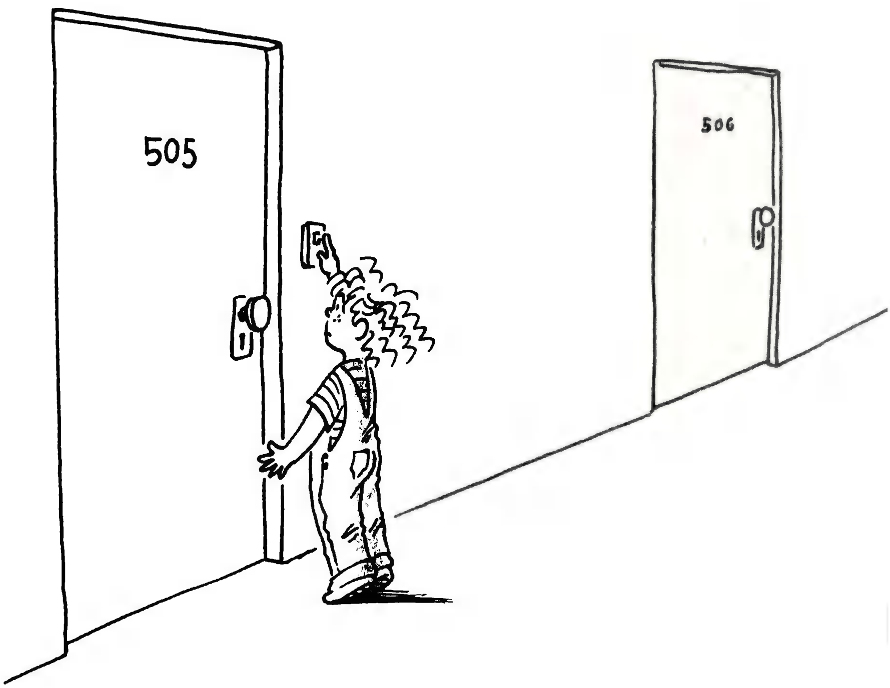


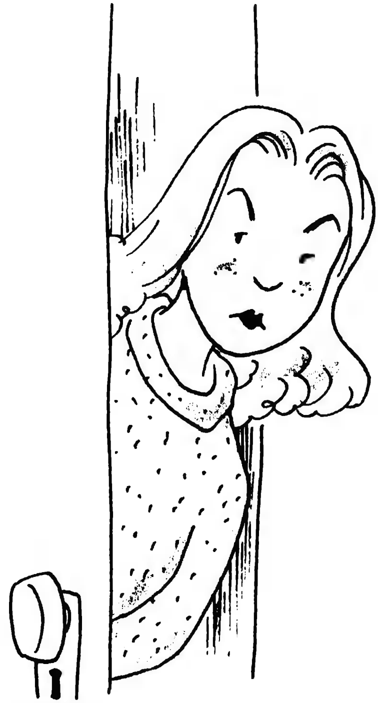
カメラちゃんは、外から見て、左から二ばんめ、エレベーターから見ると、右から二ばんめの、五〇五号のチャイムをならしました。

ピンポーン　ピンポーン

ドキドキ、ドッキン——こっちは、カメラちゃんの心ぞうの音です。

エリックもかいだんのドアのかげから、こっそり見ていますが、顔が少し青いみたいです。





ドアがほそくあいて、女の人が顔(かお)を見せました。車にのっていた女の人です。

カメラちゃんは、朝、顔(かお)を見られたことを思いだして、どきっとしました。

でも、女の人のほうはおぼえていないみたいです。

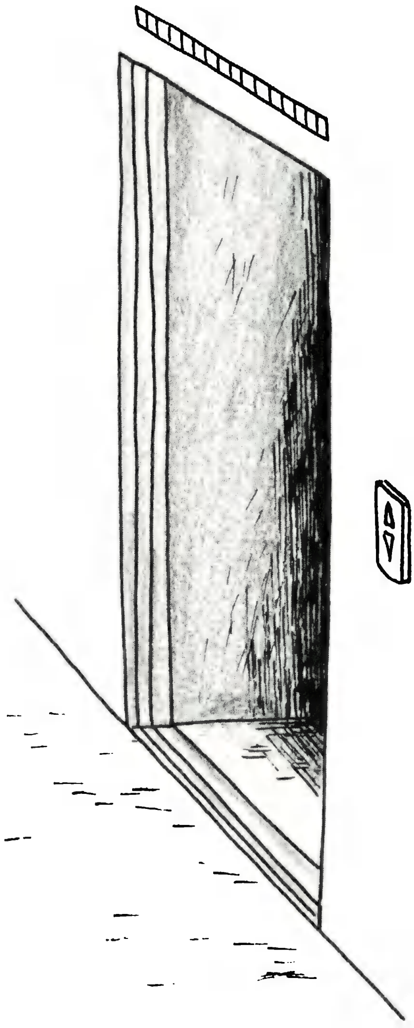
「なにか、ご用(よう)?」

「ええ、下で男の人から、かばんをとどけてほしいって、いわれて……」

「かばん? なんのかばんかしら? どんな人だった?」

「青い車にのった男の人です。いそいでいかなくてはならないから、五

○五号しつへとどけてほしいっていわれたんです。でも大きくておもいから、エレベーターにおいてあるんです」
「青い車の人ねえ、ずいぶんはやかったわね。でも、いそいでどこへいったのかしら？」
女の人はけげんそうな顔をつきだして、エレベーターを見ました。左



はしのエレベーターのドアが、あいたままとまっているのが見えます。

女の人は、ドアをあけてろうかにでてきました。

カメラちゃんがエレベーターのほうへ歩きだすと、女の人もあとについていきました。そして、エレベーターの少し手前までいったとき、うしろでバタンとドアのしまる音がしました。

女の人がはっとしてふりかえると、青いジーンズに白いテニスシャツ、くり色の髪の男の子が、非常かいだんへ走りこむのが見えました。

「まちなさいっ、ジョージ！」

女の人は、あわてておいかけていきました。かいだんをバタバタかけおりる音がします。

カメラちゃんは、すばやく五〇五号にひきかえし、入口からよびまし



た。

「ジョージ、今よ、にげるのよ！」

中から、青いジーンズに、うすいクリーム色のテニスシャツをきた男の子が、おびえた顔をのぞかせました。カメラちゃんは、男の子の手をつかむと、ひきずるようにして、もう一つの非常かいだんにはいり、戸をしめてそっとおりはじめました。

さっきの、白いテニスシャツに青いジーンズ、くり色の髪の男の子は、



もちろんエリックです。

女の人は、思ったより体格（たいかく）がいいので、つかまるとひどいめにあいそうです。

でも、エリックのほうが身（み）がるで足もはやそうなので、だいじょうぶでしょう。

かいだんのまがりかどにくるたびに、エリックはわざと、ちらちらすがたが見えるように走りました。

四かいから三がい、二かいへとにげ

ていきます。外までにげてしまえば、こっちのものです。

どんなにわるい女の人でも、まさか人通り（ひとどお）のあるところで、見ず知らずのエリックを、ひどいめにあわせることはできません。

「まちなさい！　ジョージ。ハーッ、ハーッ、ハーッ……」

女の人は、とてもいきがくるしそうです。



ふたりのカメラちゃん

通(とお)りでまっているさやかのまえで、黒い車が三台とまりました。けいかんが、三人ずつおりてきます。

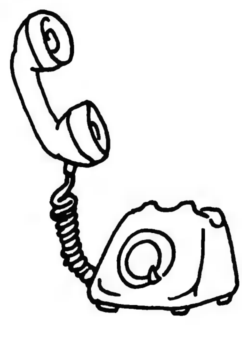
その中の一人が、さやかの前にきてききました。その人は刑事(けいじ)さんでした。

「美山(みやま)さやかちゃんはきみかい？」

「はい、あたしがさやかです。」

「けいさつに電話(でんわ)をかけたのはきみだね？」

「はい、そうです」



「じゃ、そのマンションへあんないしてくれるね」
さやかが、もとのしげみのところへいくと、男の人たちは、木のかげにかくれるようにしてついていきます。ふたりのけいかんは、トランシ



ーバーでなにかはなしています。

「おや、きみはたしか、三人で見ていたといったね。あとのふたりはどうしたの？」

「あら、どこへいったのかしら？」

カメラちゃんとエリックのすがたが見えません。

「まさか……いかん！」

刑事（けいじ）さんは、ひくい声でほかの人たちにめいれいしました。すぐに、ふたりずつマンションの右と左へ走っていきます。あとのふたりは、げんかんへむかいます。

そのとき、左の非常（ひじょう）ドアから、青いジーンズの男の子が走りでてきました。

「あ、エリック！」

　さやかが、思わずさけぶと、エリックは、はっとたちどまり、びっくりしたように、かけぬけていくけいかんを見つめました。

　そこへ、女の人がかけよってエリックの肩をつかむと、ぐいっと、うしろをむかせました。

「あれっ？」

　女の人は、びっくりしたように、エリックの顔を見つめ、肩で大きく



いきをしています。
「あの人です。あの女の人です」
さやかがいうと、女の人は、あわててにげもどろうとしましたが、たちまちけいかんにつかまってしまいました。
「人質（ひとじち）はどこだ？」
刑事（けいじ）さんは、女の人にききました。
「知りません。ジョージなんて子、あたしはぜんぜん知りません。見たこともありません。いったい、なんだってわたしをつかまえ



るんですか」
「じゃあ、なぜ、この子にらんぼうしようとした？　しかも、人質がジョージという名だと、どうして知っているんだ？」
「……」
女の人は、ふてくされて、そっぽをむきました。刑事さんのしつもんには、もう答えようとはしません。
でも刑事さんは、えんりょなくつっこみます。
「ほかになかまは、なん人いるんだ？」





六人のけいかんたちは、女の人を刑事さんとのこったけいかんにあずけて、非常ドアとげんかんにわかれて、はいっていきました。

のこったけいかんたちは、トランシーバーと、もうマンションの前まではいってきた車の無線で、いそがしくはなしています。

　まもなく、カメラちゃんとジョージが、けいかんにつれられて、右のかいだんからでてきました。

「どうだ、まだ知らないというつもりか？　いくらかくしてもむだだぞ」

刑事さんは、ふたりの男のゆくえと、ほかになかまがいないか、ききだそうとします。

「いいか、しらをきってもすぐにわかるんだ。ゆうかいじけんのときは、人質のいのちをまもるため、新聞もテレビも、人質がたすけだされるまで、じけんのほうどうはしないいんだ。

それなのにおまえは、ゆうかいされたのが、ジョージという男の子だと知っていた。



おまえのなかまの男がふたり、べつべつの車ででていったことは、この子たちが見ているんだぞ。
なのにおまえは、ゆうかいされたのがジョージという男の子だと知っていた」
「…………」
女の人はまだふてくされています。
「それから、ジョージをたすけだした子は、カメラちゃんといって、見たことを、頭（あたま）のカメラにうつしておぼえるので、ゆうめいなんだ。
これまでにも、なんどか、けいさつに力をかしてくれている。はやくかんねんしたほうがいい」
刑事（けいじ）さんは、にっこりと、カメラちゃんを見てうなずきました。それ



から、さやかちゃんに顔をむけてつづけました。
「おどろいたことに、さやかちゃんもカメラちゃんだったとは。日本のカメラちゃんだ。カメラちゃんがふたり、アメリカメラに、さやかカメラというわけだ！
日本のカメラちゃんは、おまえのなかまがのっていた車のナンバーを、ちゃんと頭のカメラにとってあったよ。あたりいったいのけいさつにてはいしたから、じきにつかまるさ」
刑事さんがいいおわったとき、けいかんのひとりが、マンションからでてきて、ほうこくしました。
「マンション五〇五号には、ほかに人はおりません」
「よし、しょうこの品をさがしておけ。われわれは、この女をけいさつ

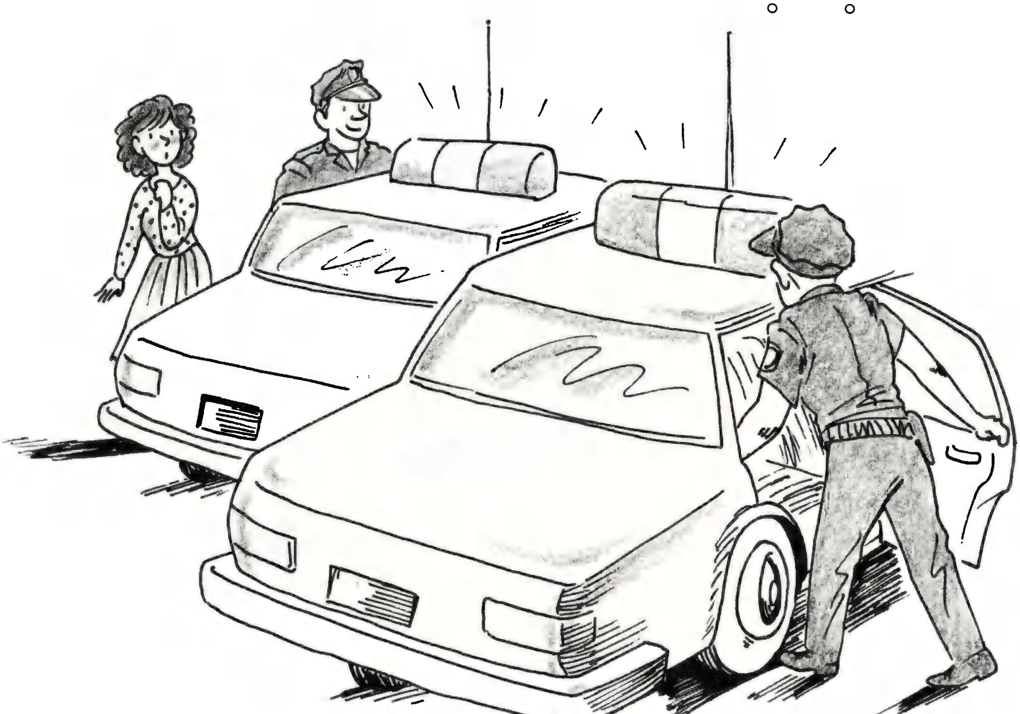
へつれていく」

けいかんが女の人を車にのせました。

さやかのお母さんがやってきました。おひるをすぎても、さやかたちがもどらないので、しんぱいして見にきたのです。

お母さんは、さやかが、なんにんもの男の人にかこまれて、はなしているのを見ると、おどろいてかけよってきました。

「どうしたの？　しんぱいしてたの

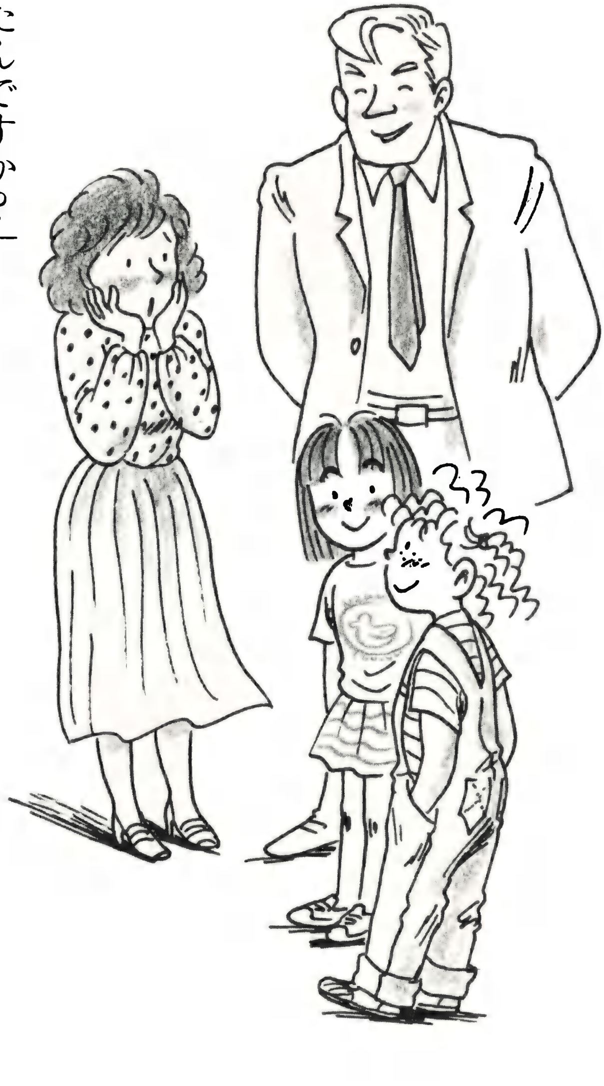


よ。

なにかあったんですか？」

刑事さんが、となりの町のジョージ少年がゆうかいされ、ばく大な身のしろ金をようきゅうされていたことを、はなしました。

そして、さやかたちのかつやくで、人質がぶじたすけだされ、まもなくのこりの犯人たちもつかまるだろうと、はなしました。



「まあ、なんてことを、この子たち。そんなあぶないことをしたんですか？　犯人につかまったりしたら、たいへんなことになるのに」

さやかのお母さんは、目をまんまるくしていいました。

刑事さんも、なんどもうなずきました。

「そうですよ、だから電話をもらったとき、ぜったい見つからないように、かくれていなさい、ただ、見はっているだけにしなさいと、いったんです。なにをするかわからないあいてですからね。

ところが、カシャッ！　カシャッ！って、いせいのいい子どもたちで、こまったもんですよ。このうえ三人まで人質にとられたら、たいへんなことでした。

きみたち、けいさつのてつだいをしてくれるのはけっこうだが、よく

考えて、あぶないところに近づかないようにしなさい。かえってめいわくになることもあるからね。

さあ、おひるをごちそうするから、けいさつまでいっしょにきてくれないかね。もっとくわしく話をきかせてもらいたい。

おわったら家までおおくりします。いいですね、お母さん？」

「ええ、けっこうですとも」

さやかのお母さんは、まだ、よくのみこめていないようです。ぽかんとしています。けいさつの車にのって、走りだしてまもなく、けいさつ無線がはいりました。

「ジョージゆうかいじけんの犯人と思われる男ふたり、たいほしました。身のしろ金をうけとりにきたところを、とりおさえました。身がらを署

へ連行します」

「よし、これで、じけんはかいけつしたようだな。むてっぽうな子どもたちのおかげでな」

　くるまの前の席で、刑事さんが、運転しているけいかんとはなしています。

「ジョージをそとへつれだしたから、けいさつも安心してマンションへはいっていけたのよ。むてっぽうだなんて……」

　カメラちゃんがいうと、さやかは、クスッ！　と、わらいました。



あとがき

かんどりのぶお

アメリカ生まれのカメラちゃんは、『ぬすまれたダイヤのなぞ』にはじまって、『きえたサインボールのなぞ』まで十巻、大ぜいのみなさんとおなじみになっています。原作者のアドラーさんは「カメラちゃん」シリーズを十巻まででおわり、ということにしてしまいましたが、もっとつづけてほしいというファンが大ぜいいます。

そこで、いままで「カメラちゃん」を日本に紹介してきた私が、あとのお話をつづけることになりました。そう思ってさがしてみると、いました、いました。美山さやかちゃんが、カメラちゃんにまけないおぼえる力、記憶力のもちぬしでした。

いまさやかちゃんは東京にいますが、アメリカの学校で、カメラちゃんと同級生でした。そのとき、カメラちゃん、エリックくんといっしょに、ゆうかいされた男の子をすくいだしたのが、このお話です。このあと、アメリカメラちゃんは、さやカメラちゃんといっしょに東京へきて、活躍します。たのしみにまっていてください。

数年まえ、あるおもちゃ屋さんがしらべたところ、東京で生まれた女の子の名前で、さやかがいちばん多かったそうです。

ジェニファーのカメラちゃん！　さやかのカメラちゃん！　いっしょにかわいがってね。

ふたりのカメラちゃん

名たんていカメラちゃん　11

初版印刷　1988年４月20日
初版発行　1988年４月25日
作　神鳥統夫
絵　垂石真子

発行者　鈴木正明
印刷所　株式会社 厚徳社
発行所　株式会社 国土社
〒112 東京都文京区目白台1-17-6
電話　(03)943-3721(営業)
943-8051(編集)

装丁　山本利一　　検印廃止

■著者紹介　神鳥統夫（かんどり のぶお）
浜松西高校をへて，東京大学経済学部卒業。永年，経法図書・児童図書の編集者をし，現在は児童図書を中心に著作翻訳活動をしている。主な訳書に「翼人の掟」(集英社)「ぼくのねこが家出した」(佑学者)「あなぐまビルのぼうけんシリーズ」（大日本図書）などがある。

■画家紹介　垂石真子（たるいし まこ）
1952年，神奈川県の海辺育ち。多摩美術大学卒業。㈱サンリオをへて，現在は，フリー。育児と仕事の両立をめざして，奮闘中。主な仕事に，「カリフォルニアの素敵な学校」（新潮社）「あっぱれしゅじゅどん」「おもしろちえくらべ」（国土社）などがある。

913
神鳥統夫
ふたりのカメラちゃん
国土社　1988
94Ｐ　22cm（名たんていカメラちゃん11）

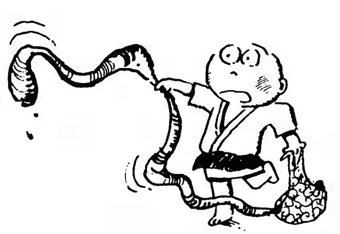
ISBN4-337-07011-7 C8391



おなかがよじれたってしらないぞ！

おもしろとんち話

冨田博之 文



小学校低学年より

国土社刊



名たんてい カメラちゃん

カメラちゃんとエリックくん
の名コンビが、大かつやく!!

D・A・アドラー作　神鳥統夫（かんどりのぶお）訳　垂石真子（たるいしまこ）絵



国土社●名たんていカメラちゃん ⑪

